

木と人と、未来のために

神籬

HIMOROGI

Vol.65 2022.4

特集 日本人が森に学ぶこと。 学校づくりから始まる、 新しい木造社会

学校建築に、木はまさに適材です。

子どもは木の柱には抱きつき、壁には身体をペタリとつけます。

(中略)そういう子どもの様子を語る先生も嬉しそうです。

(教育環境研究所 所長 長澤 悟、本文より)

学校づくりから始まる、新しい木造社会

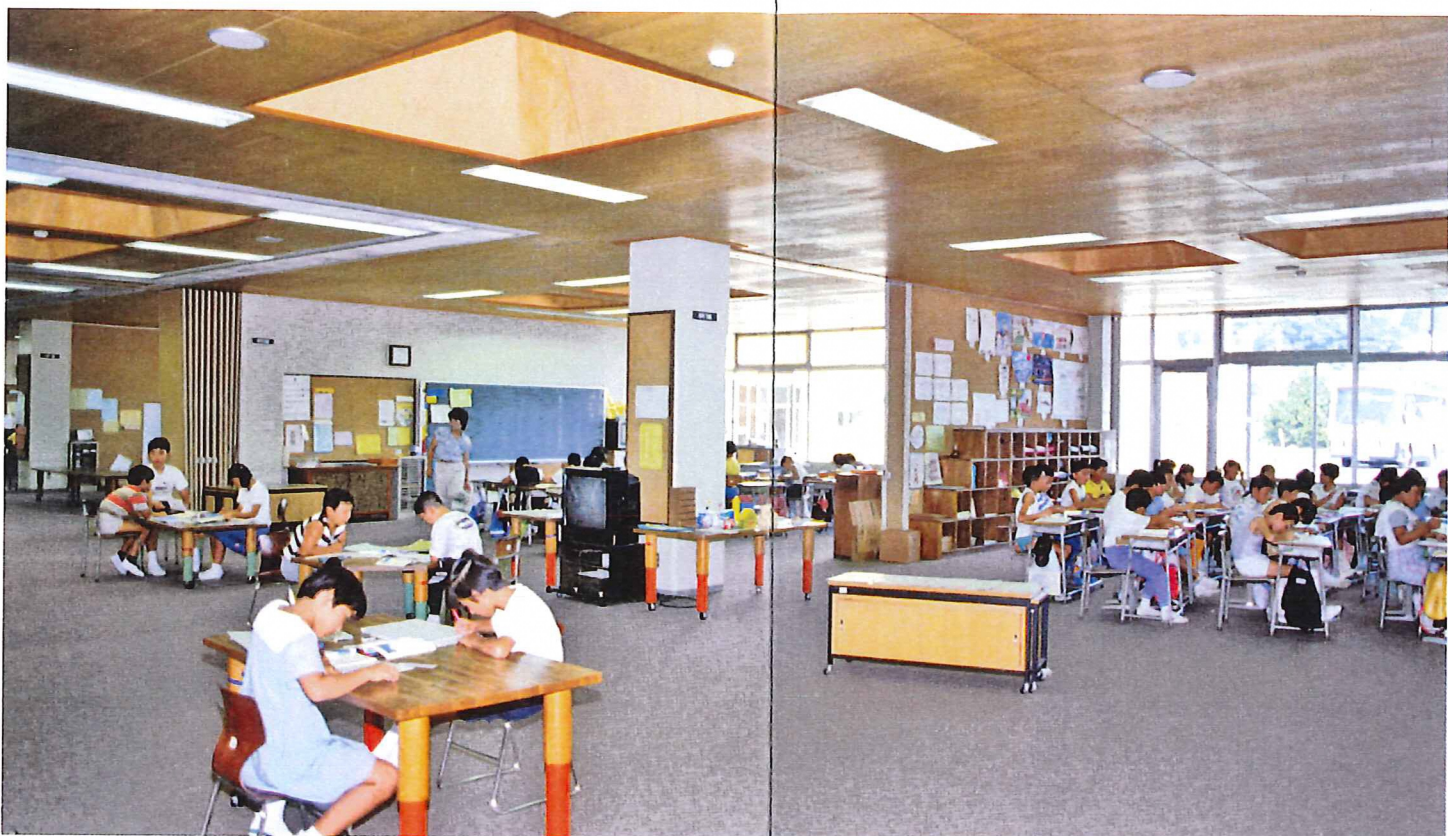
近年、大型の公共建築物にも木造が採用される例が増えてきました。代表的なもののひとつが、学校です。未来の世代を育てる場所としての学校がどのような効果をもたらすのか、学校づくりの歩みをたどりながら考察します。

長澤 悟（談） 教育環境研究所 所長

未来社会に向けて、
学校施設をとらえ直す。

DX、少子化、脱炭素化、新型コロナウイルス対応等、社会の飛躍的な変化は、教育、学校施設に大きな変革を迫っています。文部科学省は2021年に「新しい時代の学びを実現する学校施設の在り方」をまとめ、「未来思考」で学びの場を創造するために、その骨格を大樹になぞらえ、「学び」を太い幹、「生活」と「共創」を樹冠に、これを支える根として「安全」と「環境」という5つの課題を示しています。このような動きの中で、木の学校づくり

スの補助制度を設け（1984年）、また全国の教育委員会、学校を対象にした調査を行い、「教育方法等の多様化に対応する学校施設の在り方について」と題する報告書をまとめ（1988年）、総合的に考え方を示しました。その後、学校建築は大きく変化を始めます。当時、私はこうした先進事例の調査に全国を飛び回っていましたが、同時に、学校建築改革を主導された東京都立大学の長倉康彦先生の下で、沖縄をはじめ、次代を目指す



写真提供 (p3、p4、p7) / 教育環境研究所

福島県三春町立岩江小学校では、教室と連続する広々としたオープンスペースを設けた。一斉授業の枠にとられない多様な学びを実践している。

はどのような意味と可能性を持つのか、考えてみたいと思います。

私は50年近く学校建築について研究すると同時に、全国各地で300校程度の学校づくりに関わってきました。画一的だった教育、学校建築が変化を遂げた時期とちょうど重なります。教育を変え、地域にとつての学校の在り方を考えるには、当事者である教職員、地域の人々の参画が不可欠です。これを単なる学校建築の設計ではなく、「学校づくり」と呼んできました。

戦後の学校建築を振り返ると、戦災復興、児童生徒数の増加、不燃化等に対して量的整備が大きな課題となり、1950年代からRC造の標準設計をもとに建設が進められました。その結果、校舎は画一化し、木造の建設も姿を消しました。1980年前後になって、一斉授業一辺倒の教育方法を見直し、一人ひとりを大事にする教育への変革が求められるようになります。アメリカのオープンスクール等を参考に、フレキシブルな教育空間として、教室にオープンスペースを組み合わせた計画が、まず地方で始まりました。その動きを受け、文部省(当時)は多目的スペー

と、村長以下、村の主だった人々がほぼ全員参加する検討体制が整えられ、私も片道6時間程の道を30回程通いました。小規模校ならではの教育的課題と合わせ、学校全体を小中学生だけでなく村民すべてが学び、活動できる場とすることが目標となりました。完成後はその体験を自信として、住民主体の村おこしが始まりましたが、そのキャッチフレーズは「村全体が村民すべての浪合学校」。誰もが体験をもって語れる学校づくりは、参加による地域づくりそのものとなります。

もう一つが福島県三春町の小中学校の計画です。人口約2万人の町で、10年間に町内11校中8校の建設を行うことになりました。それを「小さな町の大きな教育改革」の機会ととらえた教育長、まちづくりの核とする町長の構想が合わさり、先生方と教育について、住民とは地域づくりについての話し合いが始まりました。折よく翌年から隣の郡山市にある日大工学部で教えることになり、12年間にわたつてその町に住んで計画に関わる機会に恵まれました。朝、大学に行く前に教育委員会に寄つて相談したり、教育長宅に夕食に呼ばれて遅くまで話し合ったりということもしばしばでした。「学校とは明日また友達に会えるところ」「学校は生きる喜びを育てるところ」という理念のもとに、オープンスペースやデン(小空間)を持つ小学校、教科センター方式の中学校、



右／長野県浪合村(現阿智村)の小中併設校、通称・浪合学校は、子どもたちだけでなく地域の人たちがすべての学び舎として生まれた。※中学校は他校と合併し、2022年現在、浪合小学校として存続。
左／三春町立岩江小学校のデン(小空間)は、子どもたちにとってワクワクする隠れ家のような遊び場。木のやさらかな感触や色合いが空間を包んでいる。

学校の計画設計に携わり、教育と施設の変革について教育委員会や教職員と話し合う経験を重ねました。

学校、地域の想いを込める
学校づくり。

自ら計画を手掛けた最初が横浜市立本町小学校でした(1984年)。協力教授など様々な教育実践を踏まえ、改革に向けて一斉授業を前提とした標準設計ではない校舎の検討を始めていた学校の意欲に応えようとした教育委員会から相談を受けたものです。多彩な授業を

実際に見せてもらいながら、吹抜けホールを中心に、教室と多目的スペースを一体化した学年ユニットの配置、活動の性格に応じた特別教室の再構成などの構想を先生方と共にまとめ、設計者の手で実現された豊かな空間で新たな教育が次々と生まれました。

同じ頃、人口7600人程の長野県浪合村(現阿智村)の小中併設校の計画に関わることになりました。明治に建設された校舎がまだ健在で、先人の学校建設の恩恵を受けた人々が、その想いを受け継ぎ、後世に伝えようとする学校づくりでした。そのためには将来を見通した計画が必要